

# 中学校美術科における ICT の活用と美術教育の充実

郡山市立行健中学校  
教諭 上石 直美

## 1 はじめに

今日の中学校美術教育において、単なる表現技法の習得にとどまらず、正解のない問いに対して「自ら考え、表現し、社会と関わる力」を養うことが求められている。新学習指導要領が掲げる「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱をいかにして授業内で具現化するかが、指導者にとっての課題である。特に、実体験が不足しがちな現代の生徒にとって、イメージを形にすることへの困難さは顕著である。本稿では、ICT の活用によるイメージの補完と試行錯誤の深化、そしてアートカード等のアナログ素材を用いた対話型鑑賞を往還させることで、美術への苦手意識を払拭し、生徒の主体性を引き出した実践について報告する。

## 2 ICT の有効活用による授業実践の深化

### (1) 表現領域における ICT の活用

美術科における ICT 活用は、単なるツールの導入ではなく、生徒の「構想の幅」を広げ、制作過程を「可視化」することで、自己肯定感や他者とのつながりを深めるための強力な手立てとなる。本実践では、授業の様々な場面において ICT (タブレット端末) を活用し、試行錯誤の容易化と表現の質の向上を図った。

#### ① 導入での視覚情報の共有

教科書の動画資料やデジタルアーカイブの活用により、技法のプロセスや作品の質感をダイレクトに提示した。言葉だけでは伝わりにくい表現のねらいを共有することで、生徒の制作意欲を喚起し、円滑な導入を可能にした。

#### ② 構想・彩色の段階でのイメージの補完

現代の生徒は実体験や生活イメージを形にすることに困難を抱える傾向があるため、以下の2点を中心に支援を行った。

- ・イメージの検索： 検索画像を「答え」とするのではなく、構想を具体化するための「参考資料」として活用し、経験不足を補った。
- ・彩色・レイアウトの効率化： 手描きに加え、タブレットでのシミュレーションを可能にした。比較検討が瞬時に行えるため、描画技術への不安から消極的になりがちな生徒も、大胆な試行を繰り返すことが可能となった。



制作のための資料と完成した作品を撮影してまとめた完成カード

#### ③ 制作過程でのプロセスの可視化と振り返りの蓄積

毎時間の作品状態を写真で記録し、デジタルポートフォリオとして蓄積したことにより、前時との比較が容易にでき、自分の表現の工夫や上達を客観的に捉えたり作品への愛着を高めたりすることができた。また、制作の軌跡が残ることで、完成間近の停滞期にも自らの努力を再確認し、最後まで取り組む態度を支えることができた。



制作過程の記録

#### ④ 作品の活用による社会とのつながりの実感を伴う学び

デザインの授業では、制作したマークをデジタルデータとして処理し、実際のバッグやキーホルダーとしてプロダクト化した。画面上の作品が「生活の中で活用される実用品」へと変わるプロセスを通じ、美術が日



マークのデザインと友だちからのコメント

常を豊かにする実感を伴った学びとなるようにした。また、自分が心ゆくまで試行錯誤して作り上げたデザインを身近に活用することで、作品への強い愛着が生まれ、自己肯定感を高めるとともに、生涯にわたって美術を愛好する態度の形成に繋がるようにした。

### ⑤ 評価：多角的な視点による「学びのネットワーク」

デジタルプラットフォーム（ロイロノート）上での自己評価・相互評価により、評価の質を向上させた。誰がどの部分に価値を見出したかが即時に可視化され、自分では気づけなかった「作品の良さ」を他者に認められる経験を創出した。また、相互評価のコメントを通じて、教師や友人、さらには家庭とも作品を通じた対話生まれ、表現が自分だけのものから社会へ開かれたものへと繋がっていくことを期待した。



制作したマークの活用



相互評価カード（1年生）



相互評価カード（2年生）

## （2）鑑賞領域における ICT とアナログの活用の相乗効果

ジャポニスムやルネサンスを題材とした鑑賞学習では、二つのツールを使い分けた。アートカードを手にとった直接的な対話と、タブレットによる整理・探究を組み合わせることで、それぞれの表現の特質を多角的に捉え、生徒の見方・感じ方を深化させた。

### ①アートカードによる「気づき」の共有

少し大きめのアートカードを作成したことで、生徒は作品を指し示しながら細部を注視し、自然な形で比較や意見交流を行っていた。少人数グループの設定により、普段控えめな生徒もカードの分類に積極的に加わり、全員が当事者として活動に参画できた。大胆な構図や質感の表現の違いなど直感的な気づきを引き出した。

### ②ロイロノートによる「思考の整理」

アートカードで得た関心を、タブレット上での細部拡大鑑賞へと繋がせた。資料箱の画像を精査し、自身の考えをカードに言語化することで、口頭の議論だけでは到達できない多角的で深い視点でのまとめが可能となった。



ルネサンスの鑑賞活動の様子



ルネサンスの鑑賞カード



ジャポニスムの鑑賞カード

## 3 美術部活動の充実と校内文化への貢献

美術部では、生徒一人ひとりの「描きたい・創りたい」という思いを尊重し、基礎技術の習得から共同制作、校外での体験まで、多層的な活動を展開している。これらの活動は、単なる技術向上に留まらず、生徒が「自分の表現が誰かの心を動かす（学校を明るくする、活動を支える）」という実感を持つことにつながっている。

### （1）個の技術向上と多様な表現の受容

デッサンや模写制作、コンクール出品を通じて、観察力と描写力を高めている。模写作品は中央廊下に掲示することで、個人の成果を発表するとともに全校生が名画鑑賞する機会となるように環境を整えた。さらに、月ごとのテーマ別イラストや校内イラストコンテストを開催し、生徒が親しみやすい表現も大切に扱い、階段踊り場への定期掲示を通じて、生徒一人ひとりの個性が輝く場を創出している。



中央廊下模写作品展示の様子



模写作品と作品の解説カード

## (2) 共同制作による「つながり」と校内環境の創出

仲間と協力し、学校全体を彩る活動を通して、社会性や貢献意欲を育んでいる。毎年恒例の階段アートや、それに合わせたステンドグラスの制作は、校内を華やかに彩り、来校者を温かく迎えるシンボルとなっている。また、生徒会活動と連携し、生徒会テーマの掲示物を制作し、全校生の意識統一や学校行事の盛り上げを美術の力で支えている。また、黑板アートや文化祭での共同制作に加え、郡山市立美術部展への参加により、学外の視点を意識した質の高い表現を目指している。



四季のステンドグラス



生徒会テーマとステンドグラス

## (3) 鑑賞活動・体験学習による「本物」との出会い

校内での活動から校外へ幅を広げ、豊かな感性を養う直接体験を重視している。福島県立美術館での「ジブリ展」やリトリーフアートミュージアムの見学を通じ、一流の作品に触れることで、作品への深い洞察力と鑑賞力を磨いた。また、四季の里でのガラス絵付け体験など、学校では扱えない技法や材料に触れる機会を設け、表現の幅を広げる豊かな経験を蓄積している。



階段アート



美術館見学後のまとめ

## 4 教師としての姿勢と教育的成果

教師自身が表現者であり続けることは、生徒を導く上での強い説得力になると考え、私自身、常に目標を持って制作活動に取り組み、表現を追求する姿勢を持続できるよう努めている。特に3年生の担任を務める際は、進路や行事、制作に真摯に向き合う生徒たちの姿に私自身が刺激を受け、「共に高め合いたい」という思いが制作活動への大きな原動力となってもいる。

今回の受賞を機に、校内で自作を展示する貴重な機会をいただいた。表現者としての姿を生徒に示す場を与えてくださった校長先生をはじめ、日頃から活動を支えてくださる同僚の先生方、そして温かく見守ってくださるPTAの皆様に、心より感謝申し上げたい。



作品展示の様子



授業での作品解説の様子

## 5 総括と今後の展望

振り返れば、私が行ってきたことは決して特別なことではなく、「どのように授業を展開すれば、生徒たちが迷わず主体的に活動できるか」「どのような記録や評価を行えば、生徒たちが自身の成長を実感できるか」「どのように寄り添えば、美術に苦手意識をもつ生徒も嫌いにならず、自分なりの表現を見つげられるか」など、常にこの問いを自分に投げかけ、目の前の生徒一人ひとりに向き合ってきた地道な実践の積み重ねが、今の活動に繋がっている。今後も ICT という現代的なツールと、作品を手取るアナログな温もりを最適に組み合わせ、生徒が美術を通じて自己を認め、他者や社会と豊かに関わっていけるような指導を追求していきたい。